

新年号 特集—歯?・歯の100年 1973 NO.3

# ZOOM UP



# 齊藤静三

日本歯科医師会副会長

日本の医療界は適確な医療制度が確立されないまま国民皆保険に突入し、ここ数年、慣れの中で過してきました。なかなか変化できないままの状態のなかで、わたしたち医師が解決しなければならない問題がたくさんあります。

たとえば“門前市をなす”という形の中で果して、国民のために幸福といえるような診療ができるかということです。ここで「医の倫理」というものを十分に反省しなければなりません。医の倫理の前提は「近代医術を国民に還元する」ということです。医師の満足感というものもここにあっていえるでしょう。ただ、収入があればいい（医科大学の入学に多額な寄付金を納めなければならないという遠因もありますが）という考え方では正しい医療ができません。いま、各地の歯科医師と後継者である息子との間がうまくいっていないという話を聞かされます。イスにすわって楽に治療をするような教育を受けた若い医師にとって、立ったままの診療は理解しがたいことなのです。こうした新旧のギャップを埋めなければなりません。

日本人の虫歯の保有率は95%といわれ、しかも平均、六、七本の虫歯を持っていますが、患者が多いので、せいぜい治療できるのは三分の一がやっと。これでは



まったくの悪循環、どこかで止めなければなりません。どうしても一口腔(くう)当りの虫歯をがっちり治さなければだめです。歯槽のうろうらって90%以上の人が患っているのに、治療し始めたのはつい最近、保険が効くようになってからです。現在のように患者を消化するのにあくせくといったありさまでは新し

い医療の普及もおよびもつきません。ここで私が申し上げたいのは“脱保険”ということです。だからといって保険をやめようということではなく、虫歯を減少させるという医師の本質に立ち返るという医師の価値感からスタートしなければなりません。

虫歯にしない所謂口腔衛生活動の拠点となる保険所に歯科衛生士が置けないというもおかしなことです。政府の活眼を開かせ、地方の保険所に衛生士を置いて啓蒙すべきです。さらにお菓子類も国が乳幼児の歯の健康に有害であるといった表示をつけさせることです。それからもう一つ。医師は患者との対話を十分に考えなければなりません。歯科の補填は建造物と同じ。バラックでも鉄筋コンクリートでも思いのままというようにすれば医師と患者との間のトラブルもなくなると思われます。

最後に歯科医師も医業経営の合理化とともにつねに最高の医術を身につけなければなりません。そこで、わたしたちは終身研修できるような場の建設を考えています。それには押しよせる患者の波におしつぶされそうな現状を招いた医療制度の欠陥を改め、流れを変えなければなりません。それが国民のしあわせにも通じるものであることを確信しています。

診療室拝見

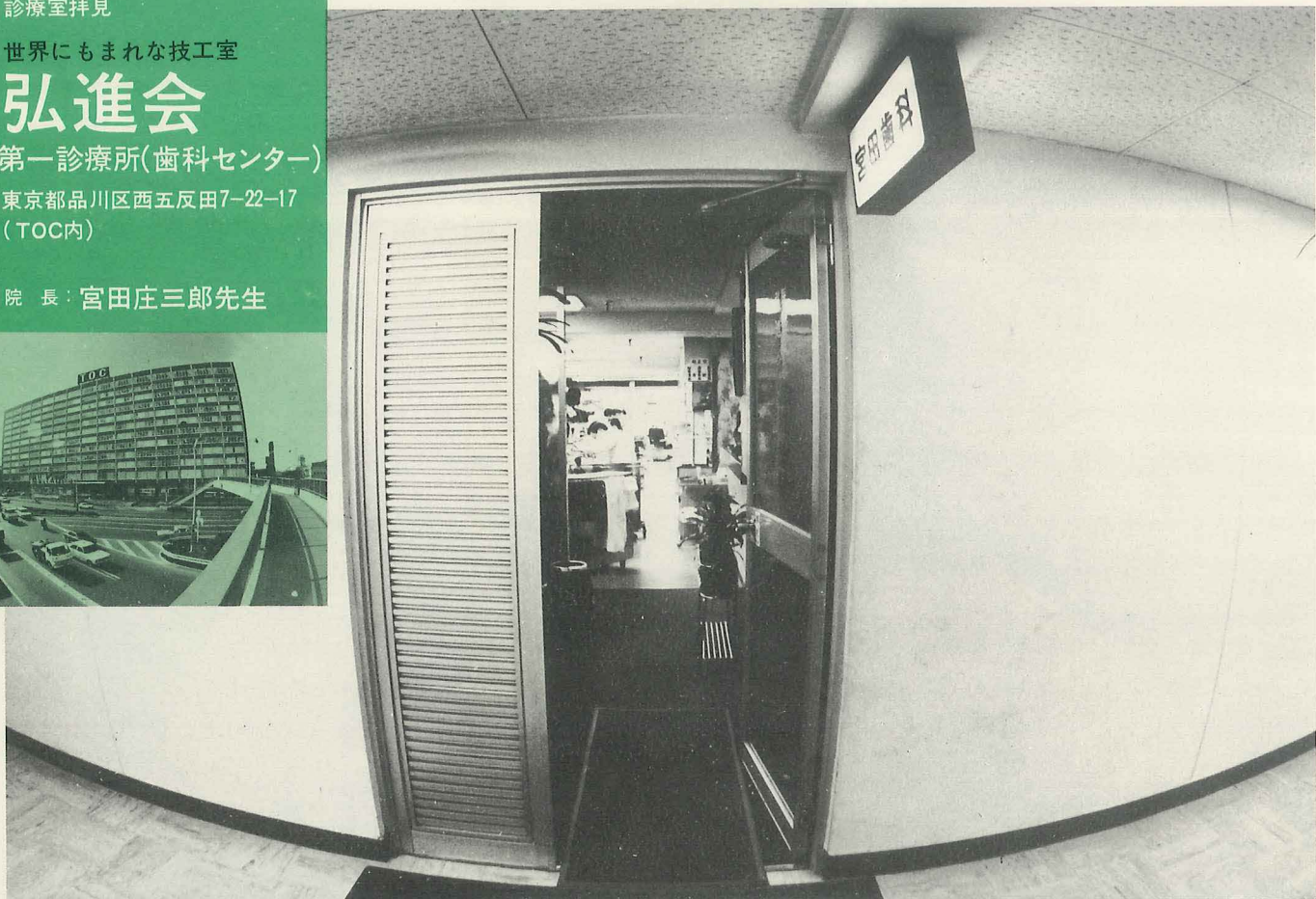
世界にもまれな技工室

# 弘進会

第一診療所(歯科センター)

東京都品川区西五反田7-22-17  
(TOC内)

院長：宮田庄三郎先生



国電山手線・五反田駅から南を望むとひととき高いビルが目につく。TOC（東京卸売センター）のスマートなたたずまい。医療法人社団「弘進会」第一診療所はこのビル中2階にある。弘進会の5つの診療所の中では一番新しく、開業してまだ2年10ヵ月。

「ほかの医院と変わったところなぞありませんよ」—診療室を拝見させていただきたいとあらかじめ電話でお願いしたとき、宮田院長はいとも無愛想な調子だった。が、診療所のドアを一步入ったとき、それは全くのけんそんだということがわかった。

受け付けの雰囲気は、どう見ても一流会社の役員室の受け付けである。カウンター上の電気スタンドや、金属製の照明器具、カーペット……。しっとりと落ち着いている。「いらっしゃいませ」という、これもまた訓練されているようにこやかな笑顔。待合室の中におかれた電気スタンドのデザインがしゃれている。きょうは、どうも照明に目がいくわいなぞと思いながら診療室へ。

細長い間取りの診療室にある数台の治療イスはブルー一色。余計なものは一切おかれていない。機能性を重視している感じは、いま通ってきた受け付けや待合室のインテリアと対照的。一台あたりのスペースがたっぷりあってあり、診療がしやすそうである。治療台と治療台の間にはカーテンドア。治療上心要があれば、それをさーっと引き延ばして個室に、という配慮なのだろう。設備はむろん最新の機械類だが、その機械の性能を100



%以上に発揮させるのは、こまかなところまで神経が行き届いた独自のへやの設計、といえそうだ。

ここの診療所は別名歯科センターとよばれている。それは、保存、補綴、口腔外科など一般の治療のほかに「特別小児室」と「矯正クリニック室」を備え、「技工士センター」までそろっている診療内容からくる呼称。

順次拝見させてもらった。まず特別小児室。この医院の一般治療室が、小学校の児童以上のための教室とすれば、特別小児室は幼稚園の遊戯室といった感じ。へやに入ったとたんにパッと目にとびこんでくるのは、赤や黄のカラフルな治療台。イスにすわった小さな子供たちには、かわいらしい花が、ほほえみかけてくるような位置におかれている。壁紙のマンガの模様、ハト時計、小犬やライオンのマスコット。それらが明るい日ざしの中にやわらかな空気をもし出している。土曜日の午後に訪れたのは運がよかった。毎週この日だけという治療を見ることができたのだから。子供たちの泣き声はなかった。専門の担当医だという若い先生

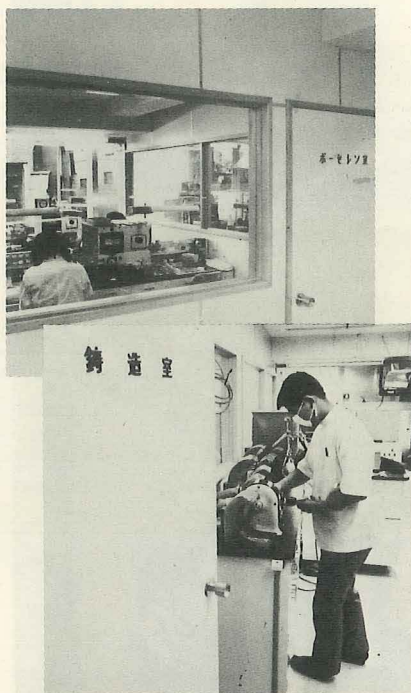


は「自分と似たような年齢の子と一緒に治療を受けているという安心感があるせいだと思いますが、ここへ来て泣く子は珍しいんですよ」とのこと。これなら先生もうんと助かるに違いない。

「矯正クリニック室」は、歯型の模型を飾った棚、ステンレスの器具箱しかおかれていない印象なのだが、よく見れば、矯正の前に必要な診断がここで全部出来るようになっていた。ここも毎週土曜日午後開設されているとのこと。

最後は「技工士センター」。弘進会の特長のひとつは、技工業務が充実していることだと聞いていた。診療所に隣接している技工士センターには「技工研究所」の看板がかけられていた。第一診療所の仕切り壁をとりはずして改造、47年10月中旬に開所したばかりだとのこと、真新しい内部は気持ちがいい。広さは約130平方メートルあり、改造前の技工室のざっと4倍になったのだそう。ほかの4つの弘進会診療所にいた技工士さんが、全部ここへ集中。技工研究所には現在技工士25人と見習いを合わせると40人になるという規模の大きさ。技工を外部へ発注している小さな診療所から見れば、うらやましい話。

研究所は大べやと、小べや二室に分かれている。大べやは白っぽい内装でとても明るい。技工台が二十ばかり。それが同じ方向に向かって並んでいる。オフィスならよくやっているスタイルだが、技工室ではまずあまりお目にかかれない図柄、ではないだろうか。ま、教室を想像していただければさいわい。



FMラジオから流れているらしいクラシック音楽が静かに聞こえる中で、技工士さんたちが無言で仕事をしている。技工台のボタンを押すと集じん装置が動いて研磨のときに出る手もとの細かなほこりを吸収してしまうとのことだった。ここでも最新の設備を見ることになった。

小べやでは、陶材冠など特殊な加工をしていた。こちらは、手づくり仕事のための作業場といった方がふさわしい。

技工士センターは、まず一般の患者には出入り無用の場所のはず。だが、もしここでの仕事を見れば、近代歯科医学への信頼感がいっそう強まるのではないだろうか。第一診療所の受け付け嬢からまたにこやかに送られてビルの廊下へ出たときふとそう考えさせられた。



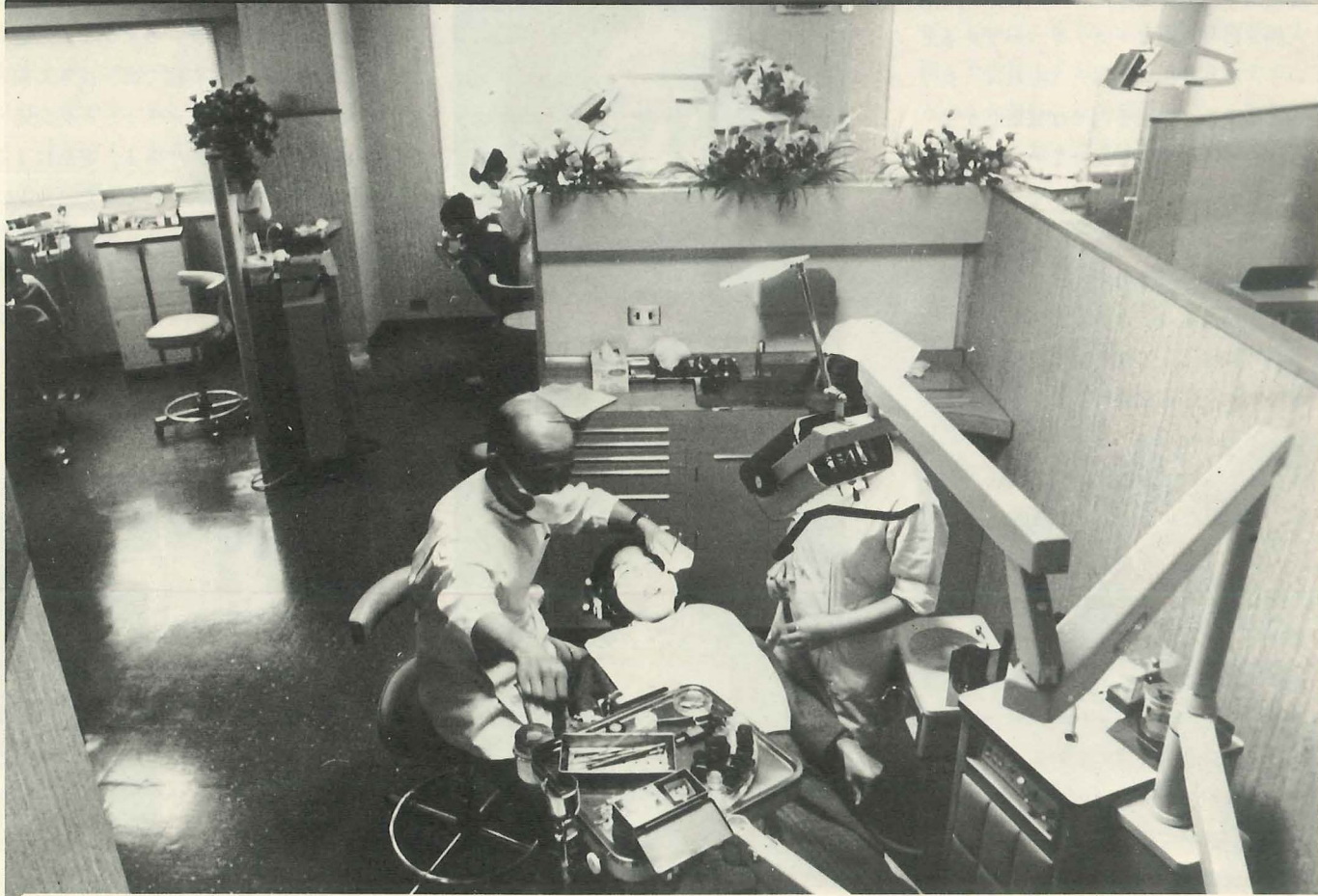
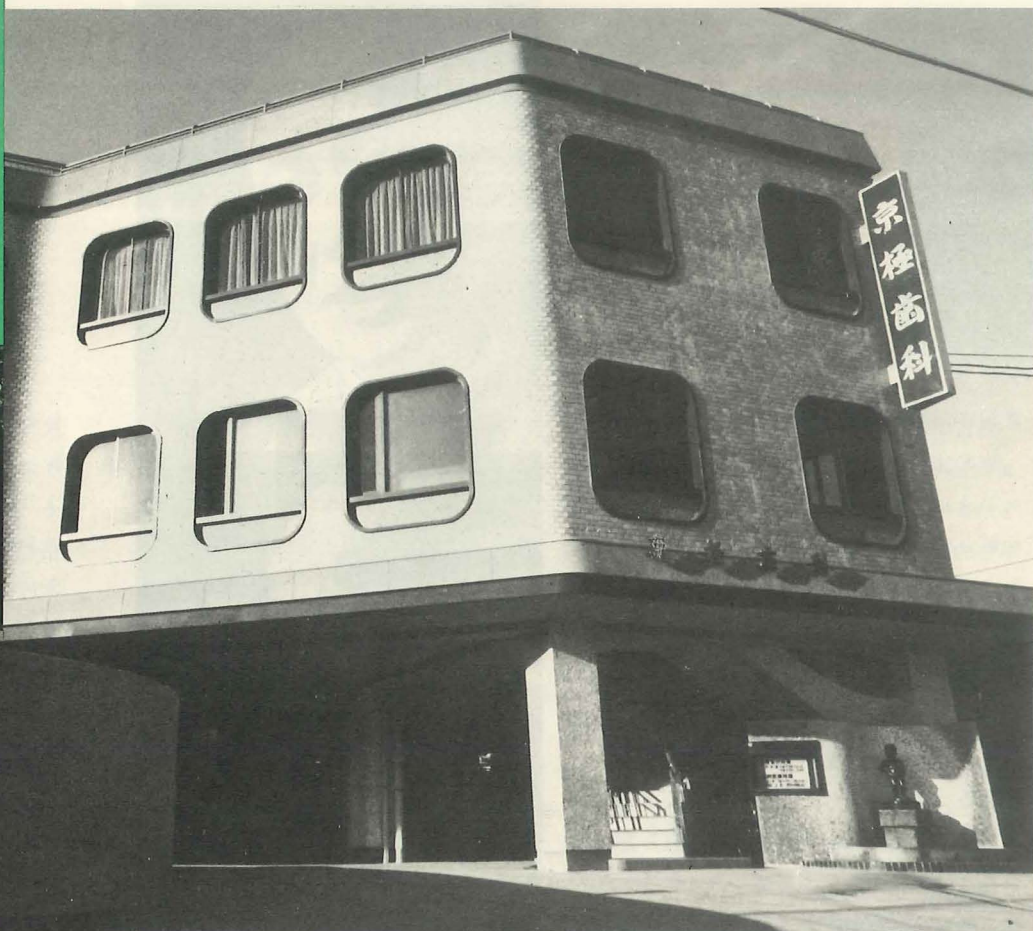
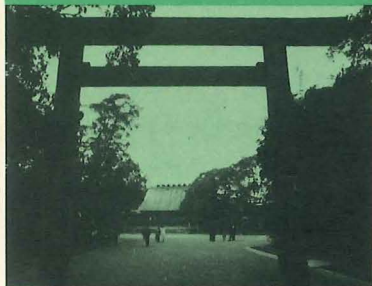
診療室拝見

由緒ある家からモダンな経営

# 京極歯科

愛知県刈谷市

院長：久田敏樹先生



名古屋から濃美平野を国道1号線に沿って三河へ向かう。夏は海水浴客で賑わう知多半島の東側。名古屋駅より名鉄電車で約三十分、刈谷市駅のすぐ前。

名古屋は、昔から関東と関西の両経済圏にはさまれ、大きな企業の育たないところとされているが、それだけに、中小の企業は、どちらからも追撃されないしっかりしたものを築いている。あるセールスマンはこういった。関西の商人は『利にさとく』、自分の商売に役立つと思ったら徹底的に信用し、一体感を持ってくる。逆に関東は、『気腑』だといわれる。この人間と信じ込めばトコトンついてくるという。それが、名古屋人となれば、良くいえば慎重で、裏を返せば狭疑心が強く、なかなか手のうちを見せない。これが、二つの大きな経済圏にはさまれながら生き続けて、自然にできあがった鉄則なのかもしれない。歴史的にみても、東国の武士が西進するときの通り道となり、数多くの戦場として踏み荒されてきたことからの、その市民性に一脈通ずるものがあるといえそうだ。

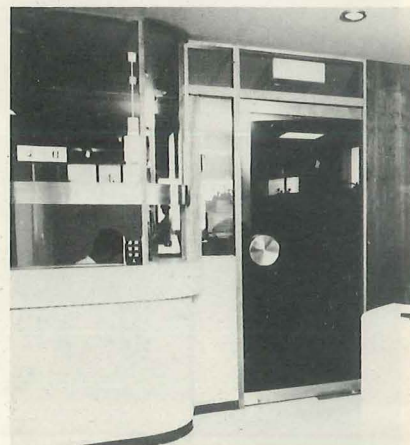
刈谷市。のどかな田園都市で、1号線からわきにはいと、田畑が広がっていて、そのなかに家が点在しているといった感じ。最近、宅地化が急激に進み、名古屋市ベッドタウンとしての色彩を強めてきた。ここにはまた、トヨタ自動車を中心にトヨタ系十社の系列会社が軒を並べており、夫は従業員、妻は農業という家庭が圧倒的に多い。だから経済的にも恵まれた家庭が多いと聞く。

京極歯科はそうしたマチの旧家である。



院長は久田姓だが、先代の院長がムコ養子になり、その旧姓をそのまま残している。『京極』という姓は由緒があるそうだ。京都の僧侶であったが、応仁の乱のとき逃げのびてきたという伝えがあって、公卿の出ということになる。その面影を感じさせる、静かなゆったりとした院長である。『マチでは、久田というよりも、京極で通っていますからね。一種の屋号みたいなものですよ』と裕悠だ。

● 昨年11月はじめにいまのところに移転新築したばかり。旧院は二百メートルも離れていないところだった。武家屋敷を思わせる土塀さえあったが、モダンな四階建てに一変した。この界限では、抜きん出たりっぱな建て物で、ホテルかと思間違うほどだ。建築中の話である。電話による入居申し込みが相次いだそうだ。『マンションと間違われましてね』。無理のない話。南西向きに『への字』型で一階は応接室・和室にガレージをゆったりとって、二階が診療フロア。八台の診療台が並ぶ。ら



せん階段もモダンで踊り場の壁にはタイルのモザイク絵がはめ込まれている「希望と太陽」をテーマに、夕日をおおぐ二人の子供が大きく描かれ、病院を明るく印象づけようとの心づかいが行き届いている。

この医院は、兄弟経営。長男の敏樹院長には四人の兄弟がいる。次男、弘己さんが経済を専攻した関係で、この医院の事務長。三男、文男さんは院長とともに診療に当たり、四男の孝さんは、愛知学院歯学部在学中で、この春には卒業する。院長夫人の晃子さんは、受け付けと、文字どりの「一家経営」。他人のいない気安さか、おだやかなものだ。他人といえば、衛生士二人、準看護婦一人、助手一人、技工三人、技工助手一人の八人。ミーティングルームも広くとってあり、診療開始前と閉院後に細かな打ち合わせを行ない、それぞれの立ち場で患者に合った診療をめざしている。最近では珍しくなくなったとはいえ、週休二日制を採用している。歯科医院の従業員確保はなかなかむずかしい。一昨年の不況時に増員計画を立てたが、従業員が働きやすい職場としての魅力に週休二日制に踏み切ったそうだ。『働き安い職場』が、院長のモットーで、診療スペースなどの設計も、従業員第一に考えたという。ここで誤解されないようにと院長。『従業員が満足できて働けるということは、患者への適切な診療として返えることですからね』一医師に以合わず、経営者としての敏腕ぶりもチラッとのおどかせる。

月、水、金が一般診療で、火、木が予約制。



共働き患者が多いため、診療時間が非常に限られることも悩みとなっているが、それを予約制や時間延長でカバーしている。とにかく、『おざなりなことは大嫌い』という院長。保険診療だけにとどまらず、患者本位に考えて治療には妥協を許さない。どこまでも話し合いで、納得してから治療を開始することにし、このため、治療前の「対話」が勢い長くなってしまふ。でも、患者はそれだけ安心して治療をまかせられるのだから、それに優るものはない。

医院の玄関前に小便小僧がユーモラスだ。これは、東京の山手線浜松町駅に寄贈した小林光さんが好んでいたもので、その小林歯科に一年間勤めていた院長が、その師をしたって設けたそうだ。





先生から………患者さんへ

# 患者さんへのイメージを変えよう。

歯科医療管理学会副会長

佐藤貞勝先生



ZoomUpのために、格調高い一文を寄せてくださった佐藤先生。東京歯科大学講師であり、歯科医療管理学会の主要メンバーです。同時に、東京渋谷の道玄坂で診療所を経営しておいでになります。

診療のあいまの30分。佐藤先生をおたずねして、「先生と患者さんの間から」という大きなテーマのお話をうかがいました。

佐藤先生の診療所におじゃましたのは火曜日だった。ちょうど、若い女性の患者さんが無理なことをいっていた。

「土曜日にヨーロッパへ発つんですが、なんとかならないでしょうか——」

しろうと考えにも、「そりゃダメだ」。

ところが、佐藤先生は、すぐさま院内電話を取りあげ、技師さんに事情を説明した。

「——そういうわけだから、金曜いっぱいには、なんとか、やってくれないか。うん、そうか、やってくれるか。じゃ、たのむよ」

そして患者さんの肩をポンとたたいて

「大丈夫。やってあげられるよ」

患者さんも、聞いていたわたしも、思わずホッとため息である。

医師と患者の関係をスムーズにするのも、こじらせてしまうのも、要は、こういう時の処理いかんなんだなア……。

どんな説明や理屈を聞くより、この二人のやりとりが、みごとな回答だった。

「医師と患者さんのあいだにあるもの？  
ひとことでいえばヒューマン・リレーシ

ョンでしょ」

佐藤先生はズバリといった。「ヒューマン」である「エコノミック」ではない。オサダが常々主張している「心のふれあいによる治療」の現場を、思いがけず見た感じがした。

「医師はあくまでプロ意識に徹して治療に当たるべきだ。患者さんは必ず理解してくれる。口先での説明なんかいらさないサ」

佐藤先生は、いつも「ホントに直す気があるなら、こっちも、完ぺきな治療をしよう。そうでないなら、やめなさい」という。初診でレントゲン、歯型、病歴と症状などを詳細にチェックし、2回目までに完全な治療プランを立てる。それを患者に示し、料金まで伝えて相手と話し合う。もし患者の予算を大幅にオーバーしていれば、「ここまでは保険、それからあとの部分はこれこれ……」と説明したうえ、ときには、「それではこの部分だけは漸定処置で2年間だけ保つようにしよう」と「取りきめ」を結ぶこともあるそうだ。

患者の身になってみると、いつまでかかるのか、いくら準備したらいいのかわからないまま、診療所通いをするほど心細いことはない。佐藤先生は、文字どおり「患者の身になって」考え、話し合うのである。

となれば、患者さんだって、当然、先生の身になる。だから、早い話が、佐藤先生の患者さんでアポイントをルーズにする人はゼロとっていい。「こっちも仕事、患者さんだって時間がきちるとき

まれば、仕事の前定が狂わないものネ」

保険はどうも——いや、これもわかります。しかし、保険ならば保険の範囲内でベストをつくす。これが、月並みだが、治療の大原則じゃないだろうか。

「医師がホントにその気で治療しているならば、最初は保険で治療に通っていても、そのうち、患者さんのほうから『保険のわくを外してください』という例が少なくありません。要は、2人のあいだのヒューマン・リレーション。それだけですよ」

そこへ、一見ヒッピー・スタイルの若者が入って来た。

「この人なんか、ウチの患者さんの優等生です。オール保険です。ええ、それでも優等生。あたしだって、こういう人だったらベストをつくしますネ。医師は、患者さんあつての医師だもの……」

失礼ながら、天下の二枚目というタイプでもない佐藤先生。だが、なんともいえない魅力がある。こっちも、ついつられて話し込む。これまた月並みだが、要は人がら。医師としての魅力以前に、人間どおしが心に触れ合う魅力をしみじみと感じた。

「ゆっくりしていけよ」といつてくださる。こっちもそうしたい。1日じゅうでも語り合いたい。

そんな感じのインタビューだった。

残念ながら、そうしていたんじゃ、せっかくアポイントどおりに来院した患者さんたちに申し訳ない……。

## ’73年のZoom UPによせて

我が国が今日ほど高度の経済成長をなし得たのは、工業立国として国の体質を変えた結果、現われたものであると考えることができます。

国質を一転して、世界の人々が望んでいる物を生産し、供給してこそ、その見返りとしての経済の豊かさが保障されるのである。

さて、歯科医学は従来、欧米より導入されたものが多く、今日でもその傾向があとをたないものの、高度の内容にまで消化し、一般国民に供給することによって、工業国として、現在大きなエネルギー源として国民の生産向上に貢献していることは確かである。

一方我が歯学界において、歯科医学、歯科医療内容の向上は今日すばらしい発展を遂げつつあるが、この医療内容の向上の裏には、医療機械の開発がなければなし得ないのが歯科医療の特色ということもできるのである。

歯科疾患の大部分が硬組織に起因するものであり、硬組織疾患の回復には硬組織の切削なくして完全な回復は望めない。これに挑戦したのが、高速切削器械である。この高速切削の出現は歯科医療の内容を一変させてしまったと言える。

すなわち、切削能率の良さに伴って、硬組織部を極めて繊細に形成することが可能になり、それによって欠損部分の修復が完全に近いほどの適合性をもたせることができるようになったのである。しかも、この作業がより楽に、より速くできるようになったことは、術者とともに患者の共通する喜びである。

このように歯科医療器械の開発は一般民衆に直結するものであることから考えて、開発と活用こそ今後ますます進めてゆかなければならないと思う。

さらに切削器械に伴って改変しつつあるのが、歯科の治療法といってよい。

福祉国家を目標としている現状において、歯牙疾患は決して減少しておらず、そのために我々にかかる負担の増大は今後も尚続くものと思わねばならない。そのためには疲労の減少をはかると同時に、能率的な器械の開発が望まれて止まない。

そういった意味から、1973年は歯科医療内容の向上化を益々図ると同時に、能率化された器械の開発と普及を望む次第である。

## アシスタント紹介

黒沢優子さん<sup>(23)</sup>

立石歯科医院=東京都大田区中央4-31-6

集団就職で秋田県北秋田郡森吉町から上京し、トランスタ工場に勤めたが、目も悪くなるし、仕事がどうも自分に合わないと、いまの医院へ。それから6年。全部で5人いるアシスタントの長としてベテランぶりを発揮している。しとやかそうっていて、シンの強そうな、感じのいい女性だ。先生や仲間から信頼されきっている様子が、落ち着いた態度からもうかがえた



ここの医院へ来たのは41年6月。「郷里の友人が勤めるはずだったのですが、来られなくなったのでそのピンチヒッターとして急に決まったのです」。最初の話では、お手伝いか何かと思っていたのが、来てみると、なんとアシスタントの仕事。綿棒も巻けずに叱られっ放し。「一週間ぐらいは夜もろくろく眠れませんでした。だって翌日叱られるのがこわくて…」。でもアシスタントは自分一人しかいないからいや応なし。一カ月もたつと、どうやらコツはのみこめた。このあたり彼女の負けん気がのぞくようだ。

じゃいまではもう叱られなくなった？  
「どういたしまして。上から順に叱られ

ております」—黒沢さんの仕事は受付から会計、材料の在庫調整、仕入れ、の仕事まで実に幅が広い。治療室の方はほかのアシスタントにまかせていて、忙しいときにだけ手助けをしている。

どんなときに叱られるの？「技工士さん以下9人いますのでにぎやかすぎるって」いやなこと、つらいことある？「病院ならどこもそうでしょうけど、夜5時30分診療が終わってもビタリと帰れないのが…」あとのことは口の中に。ここの医院では黒沢さんを含めアシスタント3人が住み込み勤務。夕食は歩いて15分くらいの院長宅ですませる。入浴したり、あと片づけなどが終わって自分の時間になるのは9時半すぎ。

毎週午後二回和裁、土曜日午後はみんなとお茶のけいこ。花嫁修業はさすが怠らない。日曜日は映画でもとプランは立てるのだが、当日になるとめんどうくさくなってやめることが多いのだそう。楽しみは何と聞くとすかさず「毎月1回、先生たちと全員でどこかへ出かけて食事をする」と明快な答え。

手紙は？「年に1回ぐらい」4人きょうだいの長女と聞いて、やっぱりという感じがした。



〔立石聰明院長のひとこと〕

がんばり屋です。下のものをぐいぐいひっぱって行ってくれますから、仕入れから何までみんなまかせっきりでいられます。院長としてはいつまでもいてほしいが、いいおむこさんを早くみつめてやらなくちゃあ。

長田電機工業の社員一同、ついで新年のおよろこびを申し上げます。

「オサダ」の製品一台を、みなさまにお届けするまでには、ざっとこれだけの者が手と心を集めるのです。

人の心と技術を何よりも大事に考える「オサダ」。この者たちが、先生の心と「オサダ」の心を結ぶ技術の持ち主です。

◇ ◇  
おかげさまで「オサダ」は年ごとに成長をとげております。ZOOM、COMBIから各パートまで「オサダ」の製品は日本の歯科医療機器の代表として、国内のみならず海外でも注目を集めました。  
◇ ◇  
これも、みなさまのご指導のおかげでございます。

◇ ◇  
73年は、さらに飛躍の年となります。従来の製品の充実をはかるのはもちろん、近く、みなさまの期待にそう「理想の製品」も、お目にかかる予定でございます。

◇ ◇  
どうぞ本年も「オサダ」を御愛顧下さるようよろしくおねがい申し上げます。

昭和48年元旦

賀正

ネジ1本にこれだけの頭脳と腕と心をこめて作ります。



長田電機工業株式会社

東京都品川区西五反田5丁目17番5号 TEL492-7651代